

[翻 訳]

メアリー・シェリー パーシー・ビッシュ・シェリー共著

「六週間の周遊記」 (2)

翻訳 加藤 芳子

ドイツ

私達が眠るまでにシェリーは、私達をマイヤンス Mayence まで運んでくれるボートを安く買ってくれていました。それで翌朝スイスに別れを告げて、私達は商品を積んだボートに乗船しました。しかし他に乗客がいなかったので、私達の静穏がそういった人達の粗野や無礼に邪魔される事はありませんでした。風は激しい逆風でしたが、川の流れは、こぎ手のわずかな努力でどんどん進みました。太陽は心地よく輝き、シェリーは私達にノルウェイから送られてきたメアリー・ウルストンクラフト [メアリー・シェリーの母] の手紙を数通、声高に読んでくれました。それで私達は楽しく時間を過ごしました。

夕暮れは美しさにおいて並ぶものが見つからないほど美しいものでした。夕暮れが迫ると、今までは平坦でつまらなかった川岸が、すごく美しくなってきました。突然川幅が狭くなったので、ボートは思いもよらない速さで、松の木に覆われた岩山の麓の周りを勢いよく走りました。窓も荒れ果てて廃墟とした塔が、川に突き出ているもう一つの山の頂きに立っていました。そのむこうに夕焼けは遠くの山並や雲を照らし、その豊かな紫色の反射を、このめくるめく川面の上に投げかけていました。川の丸い渦に映る様々な色の光輝とコントラストは、全く新しく、とても美しい現象でした。太陽が水平線の下に沈

んでいくにつれて、影はどんどん濃くなり、私達が上陸して、美しい入り江のあたりにある宿の方に歩いていくと、満月が神々しい光彩を放ちながら空に昇り、その銀色の光を、さっきまで紫色だった波の上に投げかけていました。

翌朝私達は、粗末なカヌーに乗って旅を続けました。その中ではちよとした動きも危険を伴いました。しかし流れは速さを殆ど失っていたので、岩礁に邪魔される事はありませんでした。川岸は低く、柳の木に覆われていました。私達はシュトラスブルクを通過しました。すると翌朝私達は、この小さなボートでは航行が危険になるだろうから、乗合い船に乗るべきだという助言を受けました。

私達以外にはたった四人しか乗客がいませんでした。そしてそのうち三人はシュトラスブルク大学の学生でした。シュウィツ君は、どちらかというハンサムで、上機嫌な若者。ホーフ君は、粗野で醜い^{みにく}ドイツ人らしい顔をした醜い動物の類。そしてシュナイダー君は、ほとんど白痴に近く、その連れは彼に対してずっといたずらを沢山しかけていました。残りの乗客は女性が一人と子供が一人でした。

このあたりは面白くなかったけれど、私達は好天気を楽しみ、ボートの上で外気の下で眠りましたが、何も不便な事はありませんでした。岸边には私達の注意を引きつけるようなものは殆ど何も見えませんでした。もし私がマンハイムの町を例外とすればの話ですが。そこは驚くほどきちんとしていて清潔でした。そこは川からは一マイル程の所にあり、そこに至る道は、両側に美しいアカシアの木が植えてありました。この旅の最後の部分は、陸地のふもとのそばで行われました。風は激しく逆風だったので、急流の力を全部受けても、私達は進む事を殆ど許されませんでした。私達はあのカヌーをこのボートに交換した事を自ら喜ぶべきだと言われましたが、これには一理あります。というのは、川が今や、かなりの川幅になっているので、風が大波を作っていたからです。同じ日の朝、十五人の乗客を乗せたボートが川を横断しようとして、川の真中で真っ逆様に^{てんぷく}転覆して、乗客は全員亡くなってしまったのです。私達はボートがひっくり返って流れの中に沈んでいくのを見ました。これは憂鬱な^{めううつ}光景でし

た。でも船頭は、おどけたコメントをしました。彼のフランス語の全知識は殆ど *seulement* 「…だけ」という一語で成っていました。何が起こったのか私達が聞いても、彼はこのお気に入りの二音節語を特に強調して、こう答えただけでした。「ボートだけがひっくり返っただけで、みんなおぼれ死んだだけでさあ。」

マイアンスは、ドイツで一番の城塞都市の一つです。幅広く流れが速い川が、町の東側を守っており、三リーグにもわたる周囲の山脈は、砦の印となっています。町自体は古く、道は狭く、家並みは高い。町の大聖堂や塔は、革命戦争の時に起こった砲撃の跡を、今でも留めています。

私達はケルン行きの乗合い船に座席を取ると、翌朝（9月4日）に出発しました。この乗り物は、私達がこれまでに見たものよりも、英国の商業的なものにずっと近いように見えました。それは、蒸気船のような形をしていて、客室と高い甲板がありました。私達の連れの大半は、客室に留まる事を選びました。これは私達にとっては幸運でした。というのは下層階級の人達の喫煙や、私達に同行したドイツ人達の飲酒ほど、恐ろしく不快なものはありませんでした。彼らといたら、ふんぞり返って歩いておしゃべりするし、イギリス人の眼から見て恐ろしいのは、[男同士が]互いにキスしているのです。しかし、ましな階級の商人が二、三人いて、彼らは情報通でしたし、礼儀正しい人達です。

私達が下っているあたりのライン川は、バイロン卿がその『チャイルド・ハロルド [の巡礼]』の第三篇の中で美しく描写している地域です。私達はこの詩を楽しく読みました。というのはそれは、この美しい景色を、絵画のような迫真性と鮮やかさをもって、私達の前に魔法のように呼び出して見せてくれたからです。しかも熱烈な言葉と熱い想像力という、すぐれたおまけがついているのです。私達は、危険なほど急な流れによって下流へと運ばれていきました。そして川の両側に、ブドウの木や立ち木に覆われた丘陵や、見捨てられた塔を戴いたごつごつした崖や森に覆われた島々を見ました。そこには、絵のように美しい廃墟が葉陰から覗いていて、その形をした影を荒れ狂う川面に映していました。川面はそれを變形していても、醜くしてはいませんでした。私達には

ワイン造りの人達の歌声も聞こえました。そしてもし、不快なドイツ人に囲まれていたなら、その光景は、今私が空想する程、楽しい思い出に満たされはしなかったでしょう。それでも、記憶というものは、絵からあらゆる暗い影を取り去って、ライン川のこの部分を、私の思い出に対して、地上の最も美しい楽園のように見せてくれるものなのです。

私達は、これらの景色を十分に堪能^{なんのう}できました。というのは、ボートのこぎ手は、漕ぐ事^{かじ}も舵を取る事もせず、流れに私達を運ぶのを任せたので、ボートは下っていくにつれて、ぐるぐる回転したからです。

私が、一緒にいるドイツ人といやな思いをしながら話をしている間に私は、この地では旅の途中では一つの宿で美しい女性には一人しか会っていないという事を、これらの国境に住む人達に対して告げても、公平なつもりです。彼女は正真正銘のドイツ美人とでも思いたいような女性です。かすかに茶色がかった灰色の眼、非凡な愛らしさと率直さを持っていました。最近熱病から治ったばかりで、そのため、顔付きには興味深い事にとてもデリケートな様子が備わっていました。

次の日私達は、ライン川の丘陵を離れました。そして私達の旅の残りは、オランダの平地をのろのろと移動しているのに気が付きました。川面はまた極端なくらい曲がりくねっています。そのため私達は、資金の計算をした後で、陸上の乗合い馬車で旅を終える事に決めました。乗ってきた水上の運搬船は、その晩ボンに留まりました。私達は時間を損しないために、同じ晩に早馬をケルンまで前進させました。ケルンには夜遅く着きました。というのはドイツでの旅行の速度は、時速1.5マイル [22.5 km] を超える事はまれだからです。

ケルンは宿屋に着くまで、次から次へと色々な道路を走ったので、寝る前に私達は、翌朝クレヴに出発するはずの乗合馬車の席を確保しました。このドイツの乗合馬車で旅行する位、ひどいものはこの世にはありえません。客車は体裁悪く、居心地悪く、あちこちで止まって進み方が余りに遅いので、旅の終点には着けないのではないかと思われた程でした。夕食に二時間の許可を貰いましたが、馬車を変えるのに夕方もう二時間も無駄にしました。それから私達

は次のような要求をされたのです。この乗合い馬車は、予想以上に止まる要望が多いので、私達は用意されたカプリオレ [一頭立て二輪幌馬車] で前進するようにとの事でした。私達はすぐに同意しました。というのは、この重たい乗合い馬車よりも早い旅をしたいと望んでいたからです。しかしこれは許可されなかったもので、私達はこの不恰好な機械の後を、一晩中とほとほと歩き続けたのです。朝に私達が足を止めると、一瞬の間私達はクレーヴに着いたのだと思って、希望に喜びました。クレーヴは、私達の昨晚の駅からは五リーグの距離の所にあったのに、私達は七、八時間もかかって、三リーグ進んだだけだったし、着くまでには更に八マイルも残っていました。しかし私達は、まずこの駅で三時間休みました。ここでは朝食も衣食住の便も得る事ができなかったもので、八時頃には再び出発しました。そして旅をするのは容易ではありませんでしたが、ゆっくりとそして空腹と疲労でめまいがしながらも進み、クレーヴには正午頃までには到着しました。

オランダ

乗合い馬車の遅いペースにくたびれたので、私達は行程の残りを早馬で旅する事に決めました。しかし今や私達はドイツを離れ、英国の郵便馬車と同じスピードで旅をしていました。この国は全く平坦で、道は砂だらけなので、馬はなかなか進めませんでした。この国の唯一の光彩を添えるものは、町を囲む泥炭の砦です。ナイメーヘンで私達はレディー・メアリー・モンタギュー [英国の女流文人、1689-1762]の手紙に出てきた跳ね橋を通過しました。私達は夜通し旅をしたかったのですが、夜十時頃に着いたトリエルでは、泥棒が道に横行していたせいで、そんなに夜遅くに走りたい郵便配達夫は見つかりませんでした。これは明らかに不当な要求でした。しかし私達は、馬も御者も調達できなかったもので、ここで眠る事を余儀なくされました。

次の日一日全部、道はこの国をあらゆる方向に横切っている運河の間を走っていました。道は素晴らしかったが、オランダ人は出来る限り多くの不便を考

案していました。前日の旅行中に、私達は風車のそばを通過したのですが、その風車は、道に配慮した場所にあったので、反対側の近くを素早く通らないと、風車の羽がなぎ倒すのを避けられないのでした。

運河の間の道路は、馬車一台しか通れなかったのもう一台に出くわすと、時には私達の方が半マイルも後退せざるをえませんでした。やがて私達は平地に続く跳ね橋の一つの所までやってきたら、その上には馬車が一台走っていて、もう一台がすれ違っているなどという事もありました。しかし彼らは更にもっと不快な事をしていました。亜麻というものは、刈り取ると、運河の泥の下に浸され、次に道の両側に植えてある木にかけて乾かすのですが、それが発散する悪臭は、太陽光線が湿気を引き出すと、耐えられないものになるのです。私達は運河の中に、大きなカエルやヒキガエルを沢山見ました。そして美しさで目をすっきりさせてくれる唯一の光景は、平野の美しい緑でした。草は英国のと同じ位に豊かで緑色で、大陸では余り見れない光景でした。

ロッテルダムは、驚くほど清潔です。オランダ人は、家の外側のレンガ細工さえ洗っています。私達はここに一日留まり、とても不幸な状況にある男に出会いました。彼はオランダに生れて、人生の大半を英国、フランス、ドイツとの間で過ごしたので、それぞれの国の言語をわずかしか知らず、全部を実に不完全にしか話せませんでした。彼は英語が一番分かると言いましたが、英語で言いたい事を表現する事は殆どできていませんでした。

八月八日の夕方に、私達はロッテルダムから出港しました。しかし逆風のせいで、二日近くもロッテルダムから二リーグの所にあるマーシュイという町に留まらざるをえませんでした。ここで私達の最後のギニー金貨が使い尽くされたので、私達は美しい景色の中を通り、美しいライン川や、美しい大地や、空の明るい景色をたっぷり楽しみ、更には馬車に閉じ込められているよりも、屋根なしのボートに乗って旅行し、丘の麓の道を通ったりして、八百マイルもの距離を、三十ポンド以下で旅行したのだと、驚きの念をもって思い起こしました。

私達の船の船長は英国人で、国王の水先案内人だったことがある人でした。

「六週間の周遊記」(2) (加藤芳子)

マーシュイの少し下流にあるライン川の遮断棒はとても危険なので、かなりの順風の時でなければオランダ船は誰もそこをあえて通ろうとはしないものです。しかし風向きはそれほど都合は良くなかったのに、私達の船長は出港することに決定しました。そして彼が仕事を成し遂げる前は半ば後悔していたが、臆病なオランダ人に勝ち誇って、遮断棒を横切れると、船は無事に広々とした海に出ていました。あれは本当に危険な企てでした。夜通しずっと、すごい強風が吹き荒れていたからです。朝からは、風は弱まったけれども、遮断棒の破壊者数はかなりだったのです。船が港の中で座礁してしまったために生じた多少の遅れのせいで、私達は約束の時刻よりも三十分遅れで到着しました。遮断棒の破壊者数はおびただしく、私達は、船底と砂の間には二フィートのスペースしかないという事を知らされました。すごい衝撃を与えながら船腹に砕けている波は、全く垂直になっていました。そして時には、両側の切り立った滑らかな船腹の上に垂れ下がっていました。大きなネズミイルカが大量に、荒れ狂う海のさなかでも、一番落ち着いて遊び戯れていました。

私達は、無事にこの危険を乗り越えると、予想に反して短かった航海の後で、九月十三日の朝に[英国の]グレイヴズエンドに到着しました。この日は、マーシュイを出発してから三日目の日でした。

M. [メアリー]

手紙

1816年の夏に、ジュネーヴ郊外に3ヶ月滞在していた間に書いたもの

手紙 I.

ジュネーヴ・セシュロン・ホテルにて
一八一六年五月十七日

私達は今月〔五月〕八日にパリに着きましたが、私達のパスポートに必要な様々なサインを得るためという目的で、二日間待たされました。フランス政府は、ラヴァレットの逃亡以来、以前にもまして用心深くなってきています。私達は紹介状など一通も持っていなかったし、あの町〔パリ〕には友達も一人もいませんでした。それで、ホテルに監禁されてしまったのです。そこでは到着した時には、最初は一晩だけ待たされるものと思っていたのですが、アパートの部屋を一週間分も借りなければならなくなっていました。というのはパリでは一日単位で部屋を借りれる家はないのです。

フランス人のやり方は面白い。少なくともイギリス人にとっては、同盟国のこの間の侵略以前ほどの魅力はないですが、彼らの心の不満と不機嫌は、思わず表情に出ているのです。また、彼らの国を、敵意に満ちた駐屯兵で一杯にして、いやでたまらなかつた王朝を王座に維持している政府の臣民達を、政府だけは正しいものなのだという、辛らつさと憤りをもって尊重しているのは、少しも驚くほどの事ではない。このような感情は、フランス人にとっては名誉なことですし、抑圧された人々に共感を持ち、そして自由という大義名分は、最後には勝たなければならないという、征服しがたい希望を大事にする、ヨーロッパのどの国の国民にとっても、励みになるものです。

パリからトロワまでの私達のルートは、〔英国と〕同様の面白くもない広々とした田舎で、私達はここを二年ほど前に徒歩で横断したのですが、トロワを去る時、私達はヌーシャテルに行く道をやめて、ジュネーヴに至る別の道を辿りました。ディジョンには、パリを出発してから三日目の夜に入りました。そしてドールを径由してポリニーに着きました。この町は、広大な平野からいきなり切り立っている、ジュラ山脈の麓に造られています。山の岸壁は、家々の上にぶら下がるようになっていきます。馬を調達するのが難しかったので、私達はこの地に、夕暮れが迫るまで引き留められていました。それから私達は、嵐の月明かりの中をシャンパニオルという山脈の奥にある小さな村にまで前進しました。道はくねくねしていて、とてつもなく険しい。しかも片側には、断崖だと半ば分かるものが頭上にあり、反対側は、勢いよく湧き出てくる雲の暗闇に

満ちた入り江でした。目に見えない山の川のほとばしりは、私達がもうフランスの平野を去ったという事を知らせていました。風と雨の激しい嵐のさ中に、ゆっくりとシャンパニョルに向かって上っていったので、そこにはパリを出発してから四日目の夜の十二時に着きました。

次の日の朝、私達は、峡谷や山の谷間の間を上ったりして、先へ進みました。景色は絶え間なくどんどん素敵で神々しくなっていきます。人が通れないほど密生した松の森や、人跡未踏の、否、人が入れないほどの広大な森林が、両側に広がっていました。時には下っていく暗い森は、谷間に至る道に続いていて、ねじれた木々がとてもごつごつした崖の間で絡まった根と争っています。時には道は、高く下野領域の中へと曲がりくねって伸びていき、やがて森は消えうせ、木々の枝は、雪を載せており、巨大な松の木の半分は、波のような雪の吹きだまりの中に姿を埋没しています。[氷河による稜礫土じゃない]土地の住人達の話では、春はいつになく遅かったそうで、実際、寒さは法外なほどでした。私達が山を登っている間に、谷間で私達に雨を降らせていた同じ雲が、大きな雪のかけらを沢山素早く降らせてきました。陽射しは、これらの雪のシャワーの間を通過して、時折輝き、山々の大峡谷を明るく照らしていました。山の巨大な松の木は、あるものは雪が積もっており、他のものは、あちこちにぶら下がって着いている蒸気をつららの飾りとなっていました。他のものは、明るく澄んで紺碧の色をした晴れた空へと、その濃い色の尖端を突き刺しています。

夕暮れが迫ってくるにつれて、私達はもっと高い所まで上ったら、頭上の岩を真っ白にしていると見ていた雪が、今や私達の道を侵害していました。そしてレ・ルースの村に入った時は、雪がしんしんと降っていたので、私達はその晩を、粗末な寝室と汚いベッドで過ごすことが明らかに必要だという恐れを抱いたものです。というのは、この土地からはジュネーヴに行く道が二つあって、一つはスイスの領土内にあるニオン系由で、この道は山道が短めだし、道が数リーグにわたってもものすごい深さの雪で覆われている、一年のこの時期には、比較的楽な道です。もう一つの道は、ジェ系由で、遠回りなので、一日のこのような夜更けに歩くのには危険すぎたのです。私達のパスポートは、しかしな

がら、ジェ行きになっていたので、目的地を変更するのは不可能だと言われました。しかし、警察の法律は、それ自体はとても厳しいのですが、贈賄をすれば、懐柔できる事になっているので、この時の困難な状況は、ついに克服できました。私達は、四頭の馬と十人の男を、馬車を支えるために雇い、夜六時にレ・ルースを出発しました。その時太陽はもうとっくに沈んでしまっていて、雪が馬車の窓を激しく打ち、近づく暗闇を助けて、ジュネーヴ湖とはるかかなたのアルプス山脈の景色は見えませんでした。

しかしながら周囲の景色は、私達の興味を起こさせるのに十分なくらい崇高でした——これ以上に厳かで侘しい光景はありませんでした。このあたりの木は信じられないくらい背が高く、真っ白な荒野に散在する藪の中に立っています。広漠と広がる雪原は、これらの巨大な松の木と私達の道の目印となっている柱が市松模様になっているだけでした。川とか岩に囲まれた芝生が、この崇高な景色に、絵のような美しさを添える事はありませんでした。人も住まない荒地の自然の静寂は、私達を案内していた男達の〔大〕声と不思議な対照をなしていました。彼らは、活気に満ちた口調と見ぶり手振りで、フランス語とイタリア語が混じって出来た方言で、互いに話しかけ、騒ぎまくっていました。そこには、彼ら以外誰もいないかのようでした。

私達は今度は、何と違った景色の所に辿り着いたのでしょう！ 暖かい日射しと、太陽が好きな昆虫のブンブンという音のする所へ来たのです。ホテルの窓から、私達には美しい湖〔ジュネーヴ湖〕が見えます。湖面が映している空と同じくらい青く、金色の光できらめいています。向こう岸は斜面になっていて、ブドウ畑で覆われています。しかしブドウは、この景色に対しては、この季節では早すぎて、美しさを添えてはいません。紳士達の椅子が、これらの湖岸のあちこちに散在していて、その背後には、黒い山脈の様々な山の背がそびえています。そして、雪を戴いたアルプス山脈の真中に、はるかにひときわ高くそびえるのは、アルプスの中で一番高い女王の、あの荘厳なモン・ブランの山なのです。そのようなものが、湖に映っている景色です。それは、ルツェルンで私を喜ばせてくれた、あの神々しい侘しさや、深い僻地という感じのない、

明るい夏の景色です。

私達はまだ、とても愉快的散歩道というものを見つけてはいません。しかし、私達が水上の遊覧に傾倒しているのは、ご存知でしょう。私達はボートを一艘雇って、毎晩六時に湖に出航しているのですが、これは楽しくて、鏡のような水面の上をすべるように進むか、或いは、強風にあおられて疾走するかしています。この湖の波は、海の旅で私からあらゆる楽しさを奪ってしまう、あの船酔いで私を苦しめる事が決してないのです。それどころか、私達のボートの上下の揺れは、私の精神を高揚させ、私の心に、普通にはない歓喜を吹き込んでくれます。黄昏は、こちらではわずかししか続きません。しかし私達は今のところ、満ちていく月の恩恵に浴しています。そして夜十時までには、滅多に帰宅してはおりません。その頃に岸辺に近づくと、私達は、快い草花や刈ったばかりの草の匂いや、コオロギのチーチーという鳴き声や、夕暮れの鳥の鳴き声を楽しむ事ができるのです。

私達はこちらの社交界に入ってはおりません。それでも私達の時間は、素早く楽しく過ぎていきます。私達は正午の暑い頃にラテン語やイタリア語を読み、陽射しが傾くと、ホテルの庭の中を散歩したりして、ウサギを見たり、庭の南側の壁に住んでいる無数のトカゲの動きを観察したりしています。ご存知のように、私達は、憂鬱な冬とロンドンから逃れてきたばかりなのです。そして、このとても素敵な季節にこの心地よい土地に着たので、私は、巣立ったばかりの雛のように幸せに感じています。そして、どの枝に飛んだらいいのか、殆ど気にしてもいけないので、私は見つけたばかりの翼を試してみるかも知れません。もっと経験のある鳥なら、巣を選ぶのはもっと難しいかも知れません。しかし、今の私の心の気分では、蕾みを持った花や、春の新鮮な草や、このような楽しさを生きて楽しんでいる周りの幸せな生き物が、私に、すごい喜びを与えるのに十分なのです。たとえ雲が、私の視界からモン・ブランの山を見えなくしようともです。さようなら！

M. [メアリー]

手紙 II.

コリニー — ジュネーヴ — プレンパレー

コリニー近くのカンパーニュ C-発

六月一日

私の手紙の日付から、私達が最後の手紙以来、住居を変えた事がお分かりでしょう。私達は今は、湖の反対側の岸边にある、小さな農家に住んでいて、モン・ブランと彼女の雪を戴いたエギーユ [デュ・ミディ：中間針峰] の景色と、暗くむっとりしたジュラの山を交換したのです。私達はジュラの山並みの背後に日が沈み、暗闇がアルプス山脈の向こうから私達のいる谷間の方に近づいてくるのを、毎晩見えています。アルプスはやがて、英国なら、日の光が殆どなくなった時に、秋の空の雲に伴なう、あの鮮やかなバラ色の色合いに染まります。湖は私達の足元にあり、小さな入り江には私達のボートが浮んでいます。そのボートの中で私達は、まだ昨夜の水上の遊覧を楽しんでいます。残念ながら私達は今では、この国に初めて到着した時に歓迎してくれた、あの光輝く空を楽しんでおられません、殆ど絶え間ない雨が私達をもっぱら家に閉じ込めております。しかし太陽が突然現れると、その日射しは、英国では見たこともないほど大規模でものすごいのです。私達は雷雨が湖の向こう側からやってくるのを見て、稲光が天のあちこちにある雲の間でピカッと光り、垂れ込める雲の影で暗いジュラの松の生えた山々の上に、ギザギザの光の線を矢のように放つのを観察しています。その間多分太陽は明るく私達を照らしているのです。ある夜私達は、見たこともないすごい嵐を「楽しみました」。湖がパッと明るくなって — ジュラ山脈の松の木まで見えるくらいでした。そして、景色全部が一瞬の間照らされて、それから真っ暗闇が続いたら、暗闇の中にいる私達の頭上に雷鳴が激しく轟きながらやってきたのです。

しかし、私がまだジュネーヴ近郊の田舎に住んでいる間、この町自体について、何かコメントしてほしいと思っているでしょう。でも、ここには、ごつご

つした石の上を歩く苦勞以外に、ご期待にそのような事は何もありません。家並みは高いが道は狭く、多くは上り坂で、目を引く美しい公共の建物はありませんし、あなたの好みに合うような建物也没有。町は、城壁で囲まれていて、その三つの城門は、[夜] 十時きっかりにしまり（フランスのように）^{かい}賄賂を出したところで、それを開ける事はできません。町の南側には、ジュネーヴ人の遊歩道があります。これは草原で、木が少ししか植えてなく、プレンパレーと呼ばれています。ここには、ルソーの栄光を記念した、小さなオペリスクが建ててあります。そしてここで（人生のはかなさとはこんなものです）彼を祖国から追放した人々の^{まつえい}末裔である市長達が、あの革命のさ中に、大衆によって射殺されたのです。彼の書いた物が、主にあの革命を成熟させたのです。そしてあれは、一時的な流血と、それによって毒された不正にも拘わらず、人類に対して永続的な恩恵を生み出したのです。これらは全て、政治家のごまかしや、王達の大掛かりな陰謀でさえ、完全に無駄にする事はできないのです。彼らの先祖達の思い出に敬意を表して、現在の市長達の誰も、このプレンパレーを散歩してはおりません。市民にとってのもう一つの日曜日のリクリエーションは、サレーヴ山の頂上への遠足です。この丘は町から一リーグの所にあり、耕された平野から垂直にそそりたっています。この丘は向こう側から登るのです。そして、あなたが苦勞しても、ローヌ川やアルヴ川の流域の美しい景色や、湖の岸辺を見れば報われるということは、その位置から判断できます。私達はまだ登ってはおりませんが。

こちらには、英国よりももっと平等な階級制度があります。このお陰で私達は、祖国よりも下層階級の人々の間に、進んだ自由と、洗練されたマナーを見ております。私は、いやに偉そうに構えている英国のレディー達は、この共和政体に関しては、むかつく思いをするのではないかと思います。というのは、ジュネーヴの召使は、「^{しじせき}叱責」に不平をこぼすのですが、言語を行使することが、ここでは全く知られていないせいだと、私は信じております。スイスの農民はしかしながら、フランス人の快活な言葉や優雅さを、熱心に見習っている訳ではないのかもしれない。彼らは、もっときれいな好きですが、こちらの方とは

ろく、不器用です。私は二十歳の女の子を知っていますが、彼女は一生涯をブドウ畑の中で育ってきたのに、何月になったらブドウの収穫が始まるのか、私に教える事ができませんでした。それで私は、彼女が月日が次々と続く順序というものに、全く無知だという事を発見したのです。私が燃えている太陽の事とか、十二月のおいしい果実や、七月の霜しもの事を話したとしても、彼女は驚きもしなかったでしょう。それでも彼女は、理解力に欠陥があるわけでは決してないのです。

ジュネーヴ人はまた、ピューリタニズムの傾向が強いです。日曜日のダンスの踊り方からしてそうなのです。しかしフランス政府がこの町で廃止されるや否や、市長達は、劇場を閉鎖するよう命令したので、建物を取り壊す方策がとられたのです。

私達は近頃、良い天気を楽しんでいます。そしてブドウ園の園丁達の昨夜の歌声を聞く事ほど、楽しいものではありません。彼らは女性で、大半は、男性のような声だが調和がとれています。その民謡のテーマは、羊飼いか、愛、羊の群れとか、美しい羊飼いの娘に恋をする王子達などで成っています。歌の調子は単調ですが、日が沈んでいく光景を私達の家背後の丘から、あるいは湖から見て楽しんでいる、夕方の静寂の中で、彼らの歌を聞くのは素敵なものです。このような事が、当地での私達の楽しみで、季節がもっと良い時なら、もっと楽しかったらと思います。というのは、これらの楽しみは、陽光とか優しいそよ風が授けるような喜びから、主に成り立っているからです。私達はまだ、この町の周辺に小旅行をしてはいませんが、何回か計画を立てたので、そのうちお知らせ致します。そして私達はあなたの優美なお心を、アルプスの周辺や、山の溪流や森に、運んで差し上げます。それらは、前者を身にまとい、その広漠たる影で、後者を暗くする事でしょう。さようなら！

M. [メアリー]